

令和4年1月18日

南の風 2021 ウインターカップ考察Ⅱ

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

前号の続きになります。

帝京長岡のゾーンアタックは、コネ選手（留学生）のポストを中心に中と外の合わせでした。コネ選手にボールを入れ、ディフェンスが収縮したところをキックアウト、エキストラパスで3Pを狙う作戦が主でした。コネ選手は決勝の得点が19点（リバウンドシュートも含めて）という高い数字を残しました。ただ福大大濠の執拗なボディアップやダブルチームで、相当ストレスを溜めていたことも事実です。

帝京長岡としては、キックアウトからの3Pシュートの確率をもう少し上げたかったと思います。

また傍目八目で言わせてもらえば、ゾーンアタックの基本的なエイペックスを含めたオーバーロード等で攻めてもよかったと感じました。何回かシャドー（ゾーンの背後からフラッシュする合わせ）で攻めていましたが、これももっと徹底してやってもよかった気がしました。

なぜなら、福大大濠のゾーンがコネ選手を重点に守っていたので、帝京長岡としてはコネ選手にダブルチームを行きにくくするために、コネ選手をローポストに置き、ショートコーナーに1人（外とドライブが得意なプレーヤー）、ウイングに1人（3Pシュートが得意なプレーヤー）のエイペックス（トライアングル）で攻めると、コネ選手へのダブルチームが行きにくくなるからです。

次に福大大濠の戦術についてです。

ディフェンスでは、コネ選手を如何に守るかが大きな課題であったと想定されます。2-3のゾーンとマンツーマンのチェンジングディフェンスをメインにし、ゾンプレスをポイントで使い、ボール運びに強いプレッシャーをかけていました。ショットクロックを潰すことと、相手ガードにストレスを与えハーフコートオフェンスを簡単にさせないことが狙いだったと思います。特にコネ選手がハイピックに行った後のダイブを徹底して抑え、コンタクトしてリバウンドに行かせなかったことは、チームの戦術として功を奏したのではないのでしょうか。

オフェンスです。帝京長岡のディフェンスはマンツーマンが主体ですが、コネ選手をフリーにしてゴール下に置き、ドライブをブロックすることと、ディフェンスリバウンドをゲットして味方の速攻につなげる戦術でした。福大大濠は、当然だれか一人がノーマークになるはずですが、またコネ選手はドライブに対してヘルプに出ることは少なく、ペリメーターやハイポスト付近のショットはフリーで打てる場面がかなりありましたが、精度が今一つ上がりませんでした。

福大大濠の攻めで一つ気になったことがあります。ドライブです。コネ選手はペイントの外や、ハイポスト付近までほとんど出てこないのですが、福大大濠の選手がドライブを仕掛けシュートに行くと、コネ選手に捕まる場面が多々ありました。

ドリブルのトリプルスレットで攻める手もあったと思います。ドリブルのトリプルスレットとは、皆さんご承知のようにドリブルでペイントに侵入した時に、ヘルプの位置により止まるか、ドリブルショットに持ち込むか、パスをさばくかという選択です。福大大濠のドリブラーが、そのままドリブルシュートで突っ込んでしまい、コネ選手にブロックされてしまう場面が少なからずありました。